

## 柿カメノコウロウカイガラムシの生態と防除

望月正己・守田美典

(富山県農業試験場)

- 1) ロウムシの孵化は齊一でなく、10日間以上に亘り、其の最盛期は年に依り異なる様であるが、本年度に於いては7月10日～20日頃であつた。
- 2) 1雌の臓卵数は最高が1735卵、最少が925卵で平均は1334卵であつた。
- 3) 孵化直後の仔虫は体色暗紫赤色で体長は0.5～1.0mmであり、孵化後5日～7日頃より脊面に白色の蠟質物を分泌する。此の時期より薬剤防除〔但しパラチオン剤(ホリドール粉剤)に依る〕の適期となる。
- 4) 孵化後葉に寄生し吸口を主脈及支脈に挿して栄養を攝取していた仔虫は孵化後10日～20日目頃より主、支脈を離れて網脈に移動して再び栄養攝取を行う様である。此の移動を第2次移動(但し孵化直後の主、支脈への移動を第1次移動とす)とした。
- 5) 落葉期前(紅葉期)になると葉に寄生して栄養攝取を行つていた仔虫の内、雌虫だけが翌年の結果母枝に(今年の結果枝)移動して覆蠟の厚さを更に増して越冬準備を行う。又雄虫は葉に寄生したまま蛹化羽化する。此の移動を第3次移動(越冬のための秋季移動)とした。
- 6) 雄虫の成虫出現期については昨年迄春に羽化するものと考えていたが、本年の9月30日に初めて蛹化、羽化せるものを確認し、従来よりの考えを改めた。
- 7) 9月30日の調査より推定すれば、雄虫の化蛹期は9月中旬、蛹期間は7日～10日、羽化期は9月下旬～10月上旬と考えられる。尙11月4日に雄成虫の交尾中のものを一頭確認した。
- 8) 雄成虫は羽化後直ちに雌を求めて飛び、枝に移動した(第3次移動の)雌虫と交尾を行う。
- 9) 雄成虫の生存期間は室内観察結果によると、明らかではないが7日以下の様である。
- 10) 越冬雌虫の体内に卵の形成を肉眼で認められるのは6月上、中旬からである。
- 11) 天敵としては越冬雌虫より羽化するカメノコウロウヤドリコバチ *Microterys clauseni* H. Compere と思われる一種が確認された。此の寄生率は4.6%で最高寄生率が10.8%であつた。越冬雌虫より羽化する時期は環境温度との関係が可成り高い様であり室内で飼育した場合は長期間(最も早いものが4月30日、最も遅いものが7月6日)であつた。但し採集月日は各々異り早く採集したものは早く羽化し、遅いものはおそく羽化した)に亘つて羽化した。
- 12) パラチオン剤(ホリドール粉剤)撒粉後の降雨に依る効果に及ぼす影響は撒粉後30分以上経過すれば、殺虫力に対して殆んど影響ないもの様である。
- 13) 撒布に際しては出来得る限り葉の表裏を狙う事が効果の上より最も望ましいが、脊負式動力撒粉機を使用すれば葉表だけに撒布した場合も両面撒布とほぼ同等の効果があつた。
- 14) 防除適期は分散盛期以後、第2次移動終了期迄が最も殺虫効果を挙げる事が出来る。尙此の時期には他の柿の害虫(帯虫、イラ蛾)も総合的に可成り駆除されるものと考えられる。
- 15) 従来発生甚しい煤病はロウムシの駆除により自然に防除される。
- 16) パラチオン剤(ホリドール粉剤)の殺虫有効濃度は1.5%であり、1.0%、0.5%は実用価値を認め得なかつた。

## 柿カメノコウロウカイガラムシの集団防除効果

望月正己<sup>\*</sup>・守田美典<sup>\*</sup>・山崎秀信<sup>\*\*</sup>

<sup>\*</sup>(富山県農業試験場) <sup>\*\*</sup>(富山県西礪波農業改良普及事務所)

集団防除実施計画の立案 昭和27年度より実施して来た柿カメノコウロウカイガラムシ防除試験の結果に

基いて柿栽培者の組織する組合と地区普及事務所の技術指導に依り行われたのであるが、何しろ Parathion